

中学校バレーボール授業における アンダーハンドサーブ習得のための教材開発

－動作と運動意識の変容に着目して－

中島章太郎（ 筑波大学大学院 ）

1. 目的

本研究の目的は、中学生を対象とした体育授業のバレーボール単元でアンダーハンドサーブ習得のためのドリル教材を実施し、その成果を明らかにすることであった。

2. 研究方法

1) 対象者：T 大学附属中学校 1 年生 116 名

2) 調査方法：サーブの指導ポイントを文献 (selinger 1993, 他 15 件) をもとに整理し、下手キャッチボール、振り子ボレー、コントロールサーブの 3 つのドリル教材と観察的動作評価基準を作成した。全 4 時間のバレーボール単元を通してドリルを実施し、単元前後にスキルテストを行って、動作の撮影と結果の記録を行った。また、単元を通して運動意識を学習カードに回答させた。

3) 分析方法：撮影した映像を観察的動作評価によって得点化し、単元前後の得点とサーブの結果について、それぞれ統計処理を行った。学習カードの記述については質的分析を行った。

3. 結果と考察

1) サーブ結果の変容

スキルテストにおけるサーブの試技 348 本のうちの成功本数が、学習前の 66 本 (19.0%) から学習後には 130 本 (37.4%) となり、カイ二乗検定の結果、有意な偏りが認められ、学習後にサーブの成功数が増加した。

2) 動作の変容

観察的動作評価の 6 局面 14 項目のうち、11 項目及び全 14 項目の合計得点で学習後に有意な得点の向上が認められた。ドリル学習を通して男女ともに、腕を大きく振って体重移動をしながら打つという動作を獲得することができた。一方で、男女ともに 3 項目については有意な向上が認められず、腕を床と

水平に振る動きや、打球後に肘が曲がるといった動作は改善されなかった。

3) 運動意識の変容

全 4 時間を通して最も意識した局面は「打つ瞬間」であった。また、各局面で最も意識していた内容は、構え局面では「足を前後に置くこと」、バックスイング局面では「力加減」、トス局面では「トスの高さ」、スイング局面では「腕を振る大きさ・強さ」、打つ瞬間では「手のどの部分で打つか」、フォロースルー局面では「腕の振り方」であった。また、各局面でドリル教材のねらいを意識することができた。

4) 動作と意識の関係

意識したことが動作の改善に結びついていたのは、構えの足の位置、トスのボールの上げ方、打つ瞬間の打球部位とボールの捉え方であった。一方で、学習の成果が顕著であった生徒は、スイングの体重移動について、意識と動作得点の変容に結びつきが認められなかった。さらに学習者全体でも同様の傾向があったが、その要因として、打つ方の腕を大きく振ることを意識した結果、体重移動の動作が改善されたことが考えられる。

4. 結論

本研究では、中学生を対象とした体育授業のバレーボール単元でアンダーハンドサーブ習得のためのドリル教材を実施したところ、スキルテストのサーブの成功率と動作得点が有意に向上し、学習成果が示された。また、学習者の運動意識を明らかにするとともに、意識と動作得点の変容に結びつきがあること、ドリル教材によって意識したことが動作の変容につながったことが明らかとなった。

5. 主な参考文献

1) A. Selinger 著・都澤凡夫 訳(1993)セリンジャーのパワーバレーボール. 大修館書店:44-45.